



アカシア俳句会



令和六年 春季俳句会 「句評」 春の季語を含む作品一〇五句

一、「特選句」 選定句評

○退院日背筋のばして春一番

佐藤茂弘

◆背筋のばして春一番に退院の喜びがとても良くあらわれ共感いたしました

加龍恵子

○所在なき春手袋に陽の光

藤井光正

◆庭仕事の途中置き忘れた手袋がぬくぬくといる 温かな春の日の光景がうまく切り取られていたなあと思いました

野本展子

○人気者賭博一変花と散る

戸堂博之

◆刺激の強い句ですが 真心込めて人の世話をしていた人が甘い誘いに負け信用を失ったのは何とも悲しい

都 福仁

○桜咲く褒章光る師を偲ぶ

都 福仁

◆桜の花と恩師のお姿が スツと目に浮かび懐かしい気持ちでいっぱいになりました

吉田以登

○山肌をピンクに染めて山笑ふ

加龍恵子

◆いつか見た嵐山です 自分も詠みたかった光景です 素晴らしい

戸堂博之

○花吹雪呆(ほう)けし友に会ひに行く

中野亘子

◆この方にしか詠めない句だと思いました 会いに行かれる気持ちを想像すると複雑な気分になりました

藤井光正

◆簡潔で率直な表現の中に 友への思い 若き頃への郷愁までもが感じられる 季語もよく合っていると思います

山家由紀

○正客の花衣にも花の影

中野亘子

◆お茶席が一幅の絵の様な光と陰の風情を感じさせる良い句だと思いました

元永悦子

○花散るや三丘健児の鎮魂碑

西村敏治

◆三丘会館の前に戦没学生鎮魂碑がある 除幕式には私も参加した 国のために散った同窓の若者たちの無念を想う

中野亘子

○卒業や内緒のピアス孫破顔

西村敏治

◆内緒のピアスに込めた贈り主の想いが読める それを臆することなく受け止めた孫の成長が楽しみだ

前田秀一

二、「編集後記」

「土生重次師俳句論」(**)

**…小川誠二郎編二〇〇一『抄録・重次俳句論―土生重次、かく語りき―』(復刻) 俳句会運営委員会



《今回の学び》

「言葉はやさしく、思いは深く」

百十二頁

俳句は調芸である。言葉を探すことは必要だ。しかし言葉探しには限界がある。まさか膝の上に「広辞苑」を抱えてこれをひきつつ作句する人もいないだろう。辞書にあればどんな言葉を使ってもいいというものではない。また言葉を知らないのは読み手の不勉強で辞書をひけばいいのだと切り捨て、あまり使わない言葉を一句に持ち込むのもどうだろう。そんな俳人の含蓄のない人格を疑う。

先ず作者の感動があつて、それをもたらしただものの実態を平易な言葉で詠うことだ。読者に辞書をひかせないで済むようにである。辞書をひく、ひかないは読者の問題である。読者はそれを前提にしてはならないと思う。

◆風鈴の風を貰ひて夕餉かな

石井達生

「夕餉かな」であるところが面白い。ささやかな夕餉を思う。豪華なものであれば風鈴の風を貰うわけがない。言葉は簡単に、思いは深く、である。

◆囀りに籠の一羽の加はれり

千代倉於菟

囚われの身の一羽が、天空を自由に羽ばたき囀る仲間と唱和しているのだ。あわれではないか。私は胸をつきつけあげられるような思いがした。哀しいなどと簡単に言い切ってしまうような思いだ。表面はさりげなく、しかし内容する詩情の深さに感動する。

俳句という短い詩の鋭さを、あらためて思わされた一句である

《これまでの学び》

既発行『句評』『編集後記』掲載

- ◇「俳句は叙事詩である」 季語―非凡の一節を支えるもの
令和五年『冬季・新年俳句会』
- ◇「俳句はモノに託して心を詠う文芸である」
令和四年『秋季俳句会』
- ◇「俳句は“心”や“情”を直接的に詠ってはならない」
令和四年『秋季俳句会』
- ◇「俳句は“今”をとらえた文芸である」
令和五年『春季俳句会』
- ◇「俳句は“何を詠うか”ではなく、“いかに詠うか”だ」
令和五年『春季俳句会』
- ◇「俳句は感動を詠う詩である」
令和五年『夏季俳句会』
- ◇「俳句は自然と人間との関わりを詠う詩である」
令和五年『夏季俳句会』
- ◇「俳句は『坐五』(*)がいのち」 *：「坐五」下(しも)五文字
令和五年『秋季俳句会』
- ◇「俳句は描写ですよ!」
令和六年『冬季・新年俳句会』
- ◇「言葉はやさしく、思いは深く」
令和六年『春季俳句会』

編集人 前田秀一

